



46年の船舶職歴を振り返って

皆様初めまして、司厨長の谷場年です。（年と書いてすすむと読みます）

昭和49年1月5日付けで当時の水産試験場所属の調査船相模丸に臨時船舶員として乗船し、主にグアム島の近海からサンゴ海、時には足を延ばしインド洋でマグロの漁獲調査を行っていました。

この年が第一次オイルショックと言われた年で、今でもたまにテレビでトイレトーパーを奪い合って購入している映像を目にしますが、もちろん燃料の調達も困難で、当初航海日数90日の予定が50日に変更となり、補給なしの無寄港という厳しい時代でした。

それから間もなくして新船が建造されて、調査対象魚種が一変し、処女航海はオーストラリアタスマニア沖の真イカの調査を行いました。

補給のためにポートリンカーンに入港しました。当時は何もない田舎の港町という風情でしたがどこであれ船員にとって外地の港、もちろん内地の港もですが、港に寄港する事は何よりの楽しみの一つでした。

その後は三崎港を母港に北は北海道沖から日本海、黄海、時にロシア領海にまで行って真イカの調査、南は小笠原の南、グアムの手前から沖縄県宮古島沖の金目鯛調査、東シナ海でサバフグや剣先イカの調査なんかも行いました。

そして何隻か船を乗り継ぎ、現在の江の島丸に至ります。



ここからは私の担当職務に付いてお話したいと思います。

食べるということは人間の欲求の一つであり、空腹のままだと力もやる気も出ません。

食事が摂れなければ命にも関わります。

その食ということに携わって早 40 年が経ちました。

元は甲板員でしたので、食事を供するという事は、船に乗ってから覚えたことで、今思うと苦労の連続でした。

人間の性格は十人十色と言いますが、食事でもそれに近い物があり、若い者、歳が行った者、甘党、辛党、もっと細かく言うとニンジンが嫌い、ニンニクが嫌い、ピーマンが苦手、果ては船乗のくせに刺身が食えないとまで言う輩までいて・・・

外国の研究員が乗船して来た時はその国の食を基本から勉強もしました。

それでも皆に喜んでもらえる様努力の日々で、思いが過ぎて円形脱毛症になったり、十二指腸潰瘍になったりと、体にダメージを受けながらも無い知恵を振り絞り頑張ってきた。

私は今年度一杯で定年退職となります、食事、たかが食事ですが、40 数年この食事という二文字と奮闘し携わってきたことが良かったと思える様、残りの日々を全力投球で楽しみながら過ごして行きたいと思えます。

